

# 《エジプトのモゼ》 作品解説 水谷 彰良

初出は『ロッシニアーナ』（日本ロッシニア協会紀要）第33号（2012年12月発行）の拙稿『ロッシニア全作品事典（24）《エジプトのモゼ》』。書式を変更して一部表記と構成を改め、推薦ディスクを加えてHPに掲載します。  
(2013年8月)

## I-24 エジプトのモゼ *Mosè in Egitto*

- 劇区分** 3幕のアツィオーネ・トラージコ=サークラ (azione tragico-sacra in tre atti)  
第1幕：全8景、第2幕：全6景、第3幕：全2景（1819年版は全3景）、イタリア語
- 台本** アンドレア・レオーネ・トットラ (Andrea Leone Tottola,?-1831)
- 原作** 旧約聖書の「出エジプト記」、及びフランチェスコ・リングエーリ (Francesco Ringhieri,1721-87) による5幕の聖悲劇 (トラジェーディア・サークラ) 『オジリデ (*L'Osiride*)』 (1760年パドヴァ刊)
- 作曲年** 1817年12月～2月末 (推測)
- 初演** 1818年3月5日 (木曜日)、サン・カルロ劇場、ナポリ  
註：改訂版の初演は1819年3月7日にサン・カルロ劇場で行われた。
- 人物**
- ①ファラオーネ Faraone (バス、F-e') ……エジプト王
  - ②アマルテア Amaltea (ソプラノ、c'-e") ……ファラオーネの妻
  - ③オジリデ Osiride (テノール、a-b") ……王位を継ぐ者 (ファラオーネの息子)
  - ④エルチア Ercia (ソプラノ、b b'-b") ……ヘブライ人の娘。オジリデの秘密の妻
  - ⑤マンブレ Mambre (テノール、c'-g") ……エジプトの祭司
  - ⑥モゼ Mosè (バス、F-f') ……ヘブライ人の指導者  
註：「モゼ」は役名の発音に基づく。旧約聖書に書かれたこの歴史上の人物のヘブライ語における発音は「モーシェ」で、日本では聖書における「モーセ」や一般的な「モーゼ」の2種が使われる。
  - ⑦アロンネ Aronne (テノール、c'-a")
  - ⑧アメノフィ Amenofi (ソプラノ、b b'-a b") ……アロンネの妹  
他に、エジプト人、ヘブライ人たち (合唱)
- 初演者**
- ①ラニエーリ・レモリーニ (Ranieri Remorini,?-?)
  - ②フレデリケ・フンク (Frederike Funk,?-?)  
註：初版台本の表記はフェデリーカ・フンク (Federica Funck)。
  - ③アンドレア・ノツァーリ (Andrea Nozzari,1775-1832)
  - ④イザベッラ・コルブラン (Isabella Colbran,1784-1845)
  - ⑤ガエターノ・キッツォーラ (Gaetano Chizzola,?-?)
  - ⑥ミケーレ・ベネデッティ (Michele Benedetti,1778-? [1850以降])
  - ⑦ジュゼッペ・チッチマツラ (Giuseppe Ciccimarra,1790-1836)
  - ⑧マリーア・マンツィ (Maria Manzi,?-?)
- 管弦楽** 2フルート/ピッコロ、2オーボエ、2クラリネット、2ファゴット、4ホルン、2トランペット、3トロンボーン、1セルペントーン、ティンパニ、大太鼓、シンバル、トライアングル、バンダ・トゥルカ、舞台上のバンダ (註：N.12のみ使用)、ハーブ、弦楽5部
- 演奏時間** 第1幕=約57分 第2幕=約65分 第3幕=約14分 (1819年改訂版による)
- 自筆楽譜** フランス国立図書館、パリ音楽院部門 (第3幕は第2稿でロッシニア以外の筆跡を含む。なお、ロッシニア財団その他が若干の自筆素材を所蔵)
- 全曲初版** B.Schott figli,Mainz,1822.及び Boieldieu,Paris,1822. (ピアノ伴奏譜)  
Ratti & Concetti,Roma,1825. (総譜初版)
- 全集版** I / 24 (Charles S.Brauner 校訂,Fondazione Rossini,Pesaro,2004.)
- 構成** (全集版に基づき 1819年改訂版をメインに示し、1818年初演版と1820年版との異同を注記する。但し、最初の2幕に関する楽譜上の違いはN4.ファラオーネのアリアのみ)

### 【第1幕】

- N.1 導入曲〈ああ！誰が私たちを助けてくれるのか？Ah! Chi ne aita?〉(アマルテア、オジリデ、ファラオーネ、合唱)
- 導入曲の後のレチタティーヴォ〈神の復讐の手をもって Mano ultrice d'un Dio!〉(アマルテア、オジリデ、アロンネ、ファラオーネ、モゼ)
- N.2 祈願 [Invocazione] 〈永遠！無限！人知を超えた神よ Eterno! Immenso! Incomprensibil Dio〉と五重唱〈怒りを鎮めた天の手！Celeste man placata!〉(アマルテア、オジリデ、アロンネ、ファラオーネ、モゼ、合唱)
- 五重唱の後のレチタティーヴォ〈では、反対の星しかないというのか E avete averse stelle〉(エルチア、オジリデ、マンブレ)
- N.3 エルチアとオジリデの二重唱〈ああ、もしも私を残してあなたが去れるなら Ah se puoi così lasciarmi〉(エルチア、オジリデ)
- 二重唱の後のレチタティーヴォ〈ああ！ファラオンはどこ？Ah! dov'è Faraon?〉(アマルテア、オジリデ、マンブレ、ファラオーネ)
- N.4 ファラオーネのアリア〈眼からうろこが落ち Cade dal ciglio il velo〉(ファラオーネ)
- N.4a ファラオーネのアリア〈わしを尊敬することを学べ A rispettar mi apprenda〉(ファラオーネ)
- 註：1818年と1819年に歌われたアリアはミケーレ・カラーファの作曲(N.4a)。ロッシーニは1820年の上演用にファラオーネのアリア〈Cade dal ciglio il velo〉を作曲し、全集版はこれをN.4に採用。
- アリアの後のレチタティーヴォ〈どこに隠れたらいいのでしょうか？Ove mi ascondo?〉(アマルテア、オジリデ)
- N.5 第1幕フィナーレ〈天空に、大空に All'etra, al ciel〉(エルチア、アマルテア、アメノフィ、オジリデ、アロンネ、マンブレ、ファラオーネ、モゼ、合唱)

### 【第2幕】

- レチタティーヴォ〈アロンネよ、お前の手の中に Ecco in tua mano, Aronne〉(オジリデ、アロンネ、ファラオーネ)
- N.6 オジリデとファラオーネの二重唱〈ぼくには話すことも、説明することもできない Parlar, spiegar non posso〉(オジリデ、ファラオーネ)
- 二重唱の後のレチタティーヴォ〈親切な女王さま Gentil Regina〉(アマルテア、モゼ)
- N.7 アマルテアのアリア〈失われた私の平安を La pace mia smarrita〉(アマルテア、合唱)
- 註：このアリアは旧作《バビロニアのチーロ》からの転用。1819年の上演でカットされ、1820年にもおそらく歌われなかった。
- アリアの後のレチタティーヴォ〈新たな災いだ、ああ、兄弟よ！Nuove sciagure, o mio german!〉(アロンネ、モゼ)
- N.8 シェーナ〈私をどこに連れて行くの？Dove mi guidi?〉と四重唱〈なんという試練！なんという危機！Quale assalto! qual cimento!〉(エルチア、アマルテア、オジリデ、アロンネ、合唱)
- 四重唱の後のレチタティーヴォ〈お前は何を答えられるのか？Che potrai dir?〉(ファラオーネ、モゼ)
- N.9 モゼのアリア〈お前は鎖で私の手を重くする Tu di ceppi m'aggravi la mano?〉(モゼ)
- 註：ロッシーニの作曲ではない。
- アリアの後のレチタティーヴォ〈ああ、オジリスの神よ！O Nume osiri!〉(アマルテア、オジリデ、マンブレ、ファラオーネ)
- N.10 合唱〈もしも心労を軽くしたいなら Se a mitigar tue cure〉(合唱)
- 合唱の後のレチタティーヴォ〈わかった、エジプトの民衆よ Sì, popoli d'Egitto〉(エルチア、オジリデ、アロンネ、ファラオーネ、モゼ、合唱)
- N.11 エルチアのアリア〈愛しい右手を差し出してください Porgi la destra amata〉(エルチア、アメノフィ、オジリデ、アロンネ、ファラオーネ、モゼ、合唱)

### 【第3幕】

以下、初演版と改訂版を併記。

初演版 (1818年) 註：楽譜素材は現存せず	改訂版 (1819年版と1820年版)
— レチタティーヴォ〈Che mi rechi〉 N.12 合唱〈なぜたくさんの許しが Perché permettere tanto〉	第1幕フィナーレの行進曲の繰り返し — 行進曲の後のレチタティーヴォ〈ここは安全だ、息子たちよ Eccone in salvo, o figli.〉(エルチア、アメノフィ、アロンネ、モゼ)

<p>—— 合唱の後のレチタティーヴォ〈未知なる 霊たち！ Anime sconosciuti!〉</p> <p>N.13 合唱〈この心はどこに Dov'è quel cor〉 とフィナーレ〈彼らは逃げた！ ああ天 よ！ Son fuggiti! Oh ciel!〉</p>	<p>N.12 祈り [Preghiera] 〈星の輝くあなたの玉座から Dal tuo stellato soglio〉とフィナーレ〈だが、なんと いう轟音！ Ma qual fragor!〉(エルチア、アメノフ ィ、アロンネ、マンブレ、ファラオーネ、モゼ、合唱)</p>
---	---

**物語** (時は台本に明示されないものの、紀元前 13 世紀頃。場所はエジプト)

**前段の物語** (劇の背景)：エジプトのファラオ (オペラの役名はファラオーネ) は、奴隷としたヘブライ人の解放と彼らの帰郷を許す約束を反故にした。これに怒ったモーセ (オペラの役名はモゼ) が神に祈ると太陽が消え、エジプトは暗闇に包まれてしまった。

### 【第 1 幕】

王宮。太陽が消え、闇に包まれた人々が恐怖を募らせている。自分の行いが災いを招いたと考えたファラオーネはモゼを呼ぶよう命じ、エジプト人たちも一抹の希望を抱く (N.1 導入曲)。ファラオーネがモゼに、闇の恐怖を取り去ってくればヘブライ人の帰郷を認めると告げ、モゼが厳かに祈りを捧げて杖を振るとたちまち闇は晴れ、辺りは日の光に包まれる。奇跡を目の当たりにした人々が驚きの声を挙げ、その驚きが畏敬の念へと変わると、ファラオーネはヘブライ人の帰郷を許す。人々は喜ぶが、ファラオーネの息子オジリデは恋人を失うことを嘆き (N.2 祈願と五重唱)、祭司マンブレに対し、人々がヘブライ人の解放に反対するよう説いてほしいと求める。

ヘブライ人の娘エルチアが来て、オジリデに別れの挨拶をする。愛し合う二人は苦悩するが、エルチアは出発の音楽を聞いてその場を去る (N.3 エルチアとオジリデの二重唱)。マンブレの扇動で民衆がヘブライ人の解放に反対していると知ったファラオーネは出国許可を撤回し、エジプトを出るヘブライ人を死刑にするとする。王妃 (ファラオーネの妻) アマルテアは翻意を促すが、ファラオーネはモゼに対する挑戦を宣言する (N.4/N.4a ファラオーネのアリア)。

広い平原。ヘブライ人たちが出国を前に神を讃える。独り悲しむエルチアをアメノフィが慰めていると、モゼはオジリデから王がヘブライ人の帰郷を禁じたと聞かされる。怒ったモゼが雹と火がエジプトを滅ぼすだろうと予言し、オジリデが兵士たちにモゼの殺害を命じて一触即発となるところに、従者を連れたファラオーネとアマルテアが現れる。息子の訴えを聞いたファラオーネがあらためてヘブライ人の帰郷を禁じると、モゼはファラオーネを非難し、手にした杖を振りかざす。すると突然雷が轟き、雹と火の雨が降り注ぎ、一同大混乱に陥る (N.5 第 1 幕フィナーレ)。

### 【第 2 幕】

王宮。再びエジプトを襲った災厄に恐れをなしたファラオーネは、ヘブライ人たちが明朝までにこの地を去るようアロンネに命じる。そして息子オジリデにアルメニア王女との結婚を促すが、嘆き悲しむ様子を見てその理由を尋ねる (レチタティーヴォ)。オジリデは説明できぬことに懊悩し、それを見たファラオーネは重大な隠し事があると感じる (N.6 オジリデとファラオーネの二重唱)。

モゼは事態の收拾にアマルテアの協力を求めるが、彼女は王の命令に従う方が賢明と答える。アマルテアは心の平安の失われたことを悲しみ、従者たちに慰められる (N.7 アマルテアのアリア)。アロンネからエルチアが連れ去られたと聞かされたモゼは、それをアマルテアに報せるよう告げる。

地下の暗闇。オジリデに導かれたエルチアが不安にかられる。オジリデは父からアルメニア女王との結婚を命じられたと話し、ここを逃れて一緒に暮らそうと誘い、二人は愛を確かめ合う。そこにエジプトの衛兵とアロンネを連れたアマルテアが現れ、息子とエルチアを非難する。口論となり、オジリデは王位継承権を放棄する覚悟を口にするが、エルチアはもう自分を諦めてと言い、二人は引き離される (N.8 シェーナと四重唱)。

王宮。ファラオーネは外敵の脅威を理由に、再びヘブライ人の出国を禁じるとモゼに告げる。怒ったモゼは王の庶子が全員神によって雷に打たれるだろうと警告し、「遠からず神罰が下る、そこで後悔しても手遅れだ」と言って連行される (N.9 モゼのアリア)。ファラオーネはオジリデを共同統治者にしてモゼに死刑宣告をさせるべく、宮廷に人々を集めるようマンブレに命じる。

行進曲に導かれて貴族たちが入場し、オジリデを称える (N.10 合唱)。ファラオーネはオジリデを統治者として紹介し、モゼを連れ出させる。オジリデに非難されたモゼは、ヘブライ人の解放を求める。そこにエルチアが来て人々の前でオジリデとの関係を明かし、自分のことを諦めるよう訴えるが、オジリデはなお彼女を妻にしたいと願う。そしてモゼを亡き者にしようとしたオジリデは突然雷に打たれ、その場で死ぬ。一同呆然と見守る中、エルチアは嘆き悲しむ (N.11 エルチアのアリア)。

### 【第3幕】

エリトリアの海岸。モゼとアロンネに導かれたヘブライ人たちが現れる。紅海に行く手を阻まれ、不安にかられる人々をモゼが励ます（行進曲の後のレチタティーヴォ）。モゼは跪いて神に祈りを捧げ、一同これに和して神に慈悲を請う（N.12 祈り）。遠くから兵士たちの迫る音が聞こえ、エジプト軍の追っ手に人々が怯える。モゼは彼らを黙らせ、杖で海に触れると波が二つに割れ、道が現れる。そしてモゼがヘブライ人を先導して歩いて行くと、遅れてファラオーネの軍勢が到着する。ファラオーネが「わしに続け」と号令をかけ、エジプト軍を率いて追走すると、割れていた波が消え去り、一人残らず荒れ狂う海に呑み込まれてしまう。海が静けさを取り戻し、遠くの対岸に、神に感謝を捧げるヘブライ人たちの姿が見える（フィナーレ [N.12 の続き。改訂版ト書きを含む]）。

### 【作品の成立】

ロッシーニがナポリで作曲した4作目<sup>1</sup>のオペラ・セーリア《エジプトのモゼ》は四旬節用の作品で、ロッシーニは手紙の中で「オラトリオ (Oratorio)」と称している。このジャンルはオペラ・サークラと呼ばれ、宗教的題材のため便宜的にオラトリオと理解されるが、衣装、装置、演技を伴う点で通常のオペラとの違いはなく、ロッシーニの旧作では《バビロニアのチーロ (Ciro in Babilonia)》(1812年3月14日フェッラーラのコムナーレ劇場初演)がこれに属する(ロッシーニは《バビロニアのチーロ》のことも書簡の中で「オラトリオ」と称している)。

1817年10月、ナポリで《アルミーダ》を作曲中のロッシーニは、ローマの興行師との間に謝肉祭シーズン開幕に新作オペラを初演する契約を結んだ<sup>2</sup>。だが《アルミーダ》が難航したため、ローマのための新作をナポリで作曲することにし、その台本(《ブルグントのアデライデ》として成立)を《アルミーダ》の台本を手がけたジョヴァンニ・シュミット (Giovanni Schmidt, 1775-1839) に依頼した。同年11月9日にサン・カルロ劇場で《アルミーダ》を初演したロッシーニはそのままナポリで《ブルグントのアデライデ》の作曲を始めたが、12月5日付『両シチーリア王国新聞 (Giornale del Regno delle Due Sicilie)』はローマに向かうロッシーニのナポリ不在が短期間になるだろうと報じ、その理由を「彼は四旬節の初めに王立サン・カルロ劇場で舞台にかける予定の新作オラトリオを作曲するため、年明け早々には我々のもとにいるだろうから」としている<sup>3</sup>。このオラトリオが《エジプトのモゼ》を指すのは明らかである。

12月半ばにローマ入りしたロッシーニは母に宛てた12月19日付の手紙に、「ぼくのオペラ [《ブルグントのアデライデ》] はうまくいくでしょう (andrà bene)。最初の三晩の後すぐに、オラトリオ [《エジプトのモゼ》] のためナポリに戻ります。バルバーイアはぼくが来年中に二つオペラを書くよう望んでいますが、ぼくはそう思いません」と書いている<sup>4</sup>。

1817年12月27日にローマのアルジェンティーナ劇場で行われた《ブルグントのアデライデ》初演は十分な成功を得られず、ロッシーニは3日後、母に宛てた手紙に、「今夜ナポリに向けて発ちます。ぼくのオペラはそこそこうまくいき (è andata benino)、ぼくはそのことに満足しています。ナポリでは立派なオラトリオを書きます」と記した(12月30日付)<sup>5</sup>。そして年が明けた1818年1月2日にはすでにナポリで《エジプトのモゼ》に取り掛かったことが、同日付の母宛ての手紙で確かめられる——「ぼくは無事ナポリにいて、続いてオラトリオを初演することになります」<sup>6</sup>。一週間後の母への手紙の追伸では、「ぼくは日夜オラトリオを作曲しており、それがうまくいくよう願っています」と記している(1月9日付)<sup>7</sup>。

意欲的に取り組んだロッシーニは、1月20日付の母への手紙で「ぼくは楽しんでオラトリオを作曲しており、今度は[成功を]もぎ取ります」と自信を覗かせ<sup>8</sup>、2月13日の手紙にも興味深い言葉を記している——「ぼくはオラトリオをほぼ終えました。とてもうまくいくでしょう。でも、こうした非常に高尚な作品を、このマカロニ喰いたちが理解できるかどうか判りません。しかし、ぼくは自分の栄光のために作曲するのであって、それ以外のことは気にしません」<sup>9</sup>。「マカロニ喰い (mangia macheroni)」とはナポリ人に対する蔑称で、ロッシーニが《アルミーダ》を理解しなかった彼らに嫌気の差しはじめたことが見て取れる。

警察長官が正式に上演許可を劇場側に通告したのは2月20日<sup>10</sup>、この段階でロッシーニが準備に忙殺されていたことは同月24日付の母への手紙に「ぼくはとても忙しい」と前置きし、「オラトリオはぼくを非常に疲れさせます。この分野は通俗的な効果に乏しく、むしろ崇高なもので、ぼくの名声を根本的に高めるために作りました」と記したことで判る<sup>11</sup>。

3日後の2月27日、『両シチーリア王国新聞』は「ロッシーニがオラトリオの作曲を終えた」と報じ<sup>12</sup>、ロッシ



《エジプトのモゼ》全曲の総譜手写譜  
(全2巻。1820年代、筆者所蔵)

ーニは3月3日、母への手紙の追伸に、「オラトリオの音楽が神々しく、ぼくがコルブランと結婚しようとしていると言うのを忘れていました」と書いている<sup>13</sup>。ロッシーニはこれ以前からコルブランと恋仲だったが、結婚を示唆したのはこれが最初である。そして当初この3月3日に初演を予定したが、おそらく舞台装置が間に合わずに延期され、3月5日の初日を迎えることになる。

### 【特色】

《エジプトのモゼ》は、ロッシーニのオペラ・セーリアの中でもスペクタクルな舞台効果を狙った作品で、題材も広く知られた旧約聖書の物語に拠っている。前記の手紙でも判るように、ロッシーニはこれを崇高な題材と捉えて荘厳な音楽で彩り、ナポリの聴衆の趣味を考慮せず、みずからの理想と名声のために作曲しようと努めた。台本作家アンドレア・レオーネ・トットラ (Andrea Leone Tottola,?-1831) との共同作業はこれが最初で、後にトットラは《エルミオーネ》と《湖の女》(共に1819年)、《ゼルミーラ》(1822年)の台本を手がけることになる。原作は旧約聖書の出エジプト記とフランチェスコ・リングエーリ (Francesco Ringhieri,1721-1787)の悲劇『オジリデ (L'Osiride)』(1760年パドヴァ刊)で、四旬節に聖劇を上演する慣例のあることからトットラは早期に題材を選び、台本を準備できたはずである。ロッシーニがいつ完成台本を得たのか不明だが、難航した《アルミーダ》とローマでの《ブルグントのアデライデ》初演が終わるまで作曲に取り掛かれず、ナポリに帰還した1818年1月2日(または1日)以降に着手し、3ヶ月間で完成したものと思われる。

本作はロッシーニの改革姿勢を強く押し出したオペラ・セーリアで、序曲を持たない彼の最初のオペラでもある。第1幕に主役の登場カヴァティーナやアリアが無く、独立したアリアはミケーレ・カラーファ (Michele Carafa,1787-1872)に作曲を委ねたファラオーネのアリア〈わしを尊敬することを学べ (A rispettarmi apprenda)〉(N.4a)が唯一で、第2幕もモゼのアリア〈お前は鎖で私の手を重くする (Tu di ceppi m'aggravi la mano?)〉(N.9)の作曲が不詳の第三者に委ねられている。アマルテアのアリア〈失われた私の平安を (La pace mia smarrita)〉(N.7)は最初期のオペラ・セーリア《パピロニアのチーロ》からの転用改作で、ベルカントの滑らかな歌唱テクニックが際立つもののナポリ時代の音楽とはスタイルが異なり、初演時のみで再演で歌われなかったことから二番手ソプラノのシャーベット・アリアと理解しうる(現在の上演では通例歌われる)。結果的に、このオペラでロッシーニの作曲したアリアは第2幕フィナーレに当たるエルチアの〈愛しい右手を差し出してください (Porgi la destra amata)〉(N.11)が唯一となる。レチタティーヴォの多くが筆写者によって書かれ、誤謬の多いことも全集版の校訂者によって指摘されている。

このことから、ロッシーニは規模の大きなアンサンブルと二重唱、ヒロインの大規模なアリアに力を傾注したことが判る。これは合唱を重視するオラトリオの作劇と、トットラ台本の双方に起因している。ロッシーニが苦慮したのも合唱を伴う大規模なアンサンブルと劇的展開との深い結びつきにあると思われ、該当曲は導入曲、祈願と五重唱、第1幕フィナーレ、四重唱、エルチアのアリアと、全体の4割に及んでいる。これに長大な二つの二重唱、合唱と管弦楽による第3幕を加えると、完全にアンサンブル・オペラであることが判る。

全3幕、12のナンバーのうちロッシーニの作曲した楽曲は、荘重にして重厚かつ真摯な音楽ばかりである。粛々とした合唱とアンサンブルで始まる第1幕導入曲(N.1)が暗闇であるとの設定も、当時のオペラの常識を覆すものといえる。続く祈願と五重唱(N.2)はモゼの力強く厳粛な祈りの伴奏付きレチタティーヴォで、一瞬にして闇が晴れて光に包まれるスペクタクルを前提とする。ロッシーニはこの闇から光への転換の表現をハイドン《天地創造》に学んだと思われ、人々の驚きが畏敬の念に変わる様子をカノンの手法を用いた荘厳な五重唱で表現し、続いてテンポを速めて合唱を交えたアンサンブルとなる。エルチアとオジリデの二重唱〈ああ、もしも私を残してあなたが去れるなら (Ah se puoi così lasciami)〉(N.3)は急〜緩〜急の三部分からなる大規模なデュエットで、エルチアとオジリデの恋のやりとりがベルカントの装飾的パッセージを交えて歌われる。

第1幕フィナーレ(N.5)は、大きくアレグロ・ブリッランテ〜アンダンテ〜アレグロの三部分に分けられ、行進曲の合唱を伴う第一部分に続いて中間部にエルチアとアメノフィの叙情的な二重唱を挟み、アンサンブルのストレッタとなる。このストレッタは対立関係を描く部分で始まり、モゼの新たな奇跡を挟んで無伴奏の四重唱を伴う厳粛な音楽に転じ、雹と火の雨が降り注いで幕となる。

第2幕は、アルメニア王女との結婚を持ち出されて戸惑うオジリデと父ファラオーネのすれ違う思いを巧みに音楽化した二重唱(N.6)で始まり、カバレッタの向上主題が大変魅力的である。旧作から転用されたアマルテアのアリアに続くシェーナと四重唱(N.8)は、中間部にハーブの伴奏で歌われる四重唱「声も出ない (Mi manca la voce)」が置かれ、その印象的な音楽は初演時から高い評価を得た(但し、締め括りのストレッタはやや常套的)。規模の大きなエルチアのアリア〈愛しい右手を差し出してください〉(N.11)は実質的な第2幕アリア・フィナーレで、中間部にオジリデが雷に打たれて死ぬ急展開と息子の死を悲しむファラオーネを描き、エルチアの悲嘆がカバレ

ッタで劇的に歌われる。なお、N.9 モゼのアリアは不詳の第三者の作曲で精彩を欠き、N.10 の合唱は《ブルグントのアデライデ》からの転用、エルチアのアリア (N.11) のプリモ・テンポ主題は《パルミラのアウレリアーノ》に起源を持つ。

第3幕は初演版 (1818年) の楽譜が失われ、改訂版 (1819年版と1820年版) がその後の上演の原本となっている。台本から判断しうる初演版は、レチタティーヴォ～合唱 (N.12) ～レチタティーヴォ～合唱とフィナーレ (N.13) からなる。改訂版は行進曲とレチタティーヴォに続く祈りとフィナーレが一つのナンバー (N.12) に集約され、1819年の改訂で新たに作曲した祈り (Preghiera) 〈星の輝くあなたの玉座から (*Dal tuo stellato soglio*)〉は真摯な祈念の音楽として名高く、短調から長調への鮮やかな転換が壮麗な効果を導く。この「祈り」はヴェルディ《ナブコドノゾール》の〈行け、思いよ、金色の翼に乗って〉と共にイタリアの愛国的ナンバーとなり、第二次世界大戦の爆撃で破壊されたスカラ座の復興記念コンサートでもアメリカから帰国したトスカニーニがこの二つを演奏した (1946年5月11日)。フィナーレに相当する〈だが、なんとという轟音! (*Ma qual fragor!*)〉の大半は管弦楽のみで演奏され、舞台上のスペクタクル (あらすじ参照) を音画的に描写し、それ以前のロッシーニ作品には無い異例の幕切れとなっている。

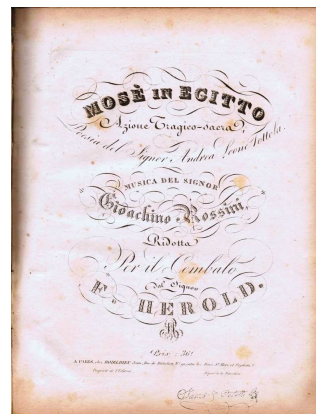
イザベッラ・コルブランとアンドレア・ノッツァーリを含む初演歌手は、このシーズンにデビューしたフレデリケ・フンクを除く全員がサン・カルロ劇場の専属歌手としてロッシーニ作品の初演と深い係わりを持ち、卓越した技巧を備えていた。そして初演が失敗したとの定説——スタンダールが『ロッシーニ伝』に記したフィナーレの大失敗に起因する——も、現在は空想の産物とされている。

### 【上演史】

1818年3月5日にサン・カルロ劇場で行われた初演は成功を収め、3月14日付『両シチーリア王国新聞』は、「ロッシーニはナポリで彼の《エジプトのモゼ》により新たな成功を収めた。素朴で自然、真の表現と非常に爽やかな旋律に合った歌、恐ろしく、悲愴な [局面で] 用いられた節度あるハーモニーの最大限の効果、めまぐるしく、高貴で表情豊かなレチタティーヴォ、同様に表情豊かで、感動的で雄弁な合唱、二重唱、三重唱、四重唱等々、それこそがこの新しい音楽の長所である」と称賛した<sup>14</sup>。ロッシーニは3月16日付の手紙で母に、「オラトリオのことはすでにニュースが届いていると思うのでお話しませんが、同じような音楽はもう書かないことにします。今回みたいに多くの忍耐と便宜 [を強られるのは] は御免だから。[中略] 優秀なコルブランがぼくのオラトリオを天使のように歌いました。聴衆も、この優れた女優で卓越した歌手にふさわしい判断を下すと保証します。[中略] モラッキのオペラは大失敗で劇場が空っぽになりましたが、ぼくの] オラトリオは毎晩満員で、コルブラン夫人とマエストロは拍手喝采を受けに舞台に呼ばれました」と記している<sup>15</sup>。

その後ロッシーニは翌1819年3月と1820年3月のサン・カルロ劇場再演に際して《エジプトのモゼ》を改作したが、これについては付記で明らかにする。これに続く再演は全集版序文に印刷台本に基づく各都市での上演一覧が掲載されており<sup>16</sup>、イタリアでは1820年の四旬節にパレルモ、1821年謝肉祭にジェノヴァ、四旬節にフィレンツェ、春期にヴェネツィア、9月にシエナ、1822年の秋にミラーノとベルガモ、1823年四旬節にリヴォルノ、夏にヴィチエンツァ、1824年4月にペルージア、1825年にパルマ、ローマ、アンコーナ、1826年にペーザロ、ルッカ、トリノー、1827年にヴェローナ、トリエステ、クレモーナ、レッジョ、パドヴァ、フェッラーラにて、各都市における初演の行われたことが判る (同じ都市での再演については省略)。国外での上演は1822年1月11日ミュンヘンを皮切りに、同年4月ロンドン (《隠者ピエトロ [Pietro l'eremita]》と改題して上演)、10月20日パリ (王立音楽アカデミー劇場。イタリア語上演)<sup>17</sup>、1823年リスボンとドレスデン、1825年ポルト、ヴィーン、カゲイス、1829年マドリッド、1834年にバルセロナとリヴァプール (《Pietro l'eremita》と改題) で上演された。しかし、ロッシーニが1827年にパリのオペラ座で初演したフランス語改作《モイーズ [モイーズとファラオン]》が成功を収め、そのイタリア語版が流布したため本来の《エジプトのモゼ》は1830年代にその役割を終え、1840年のパリと1845年のフィレンツェに続く1891年フィレンツェが19世紀最後の上演となった。

20世紀の復活上演は1978年4月3日、ニューヨークのエイヴリー・フィッシャー・ホール (Avery Fischer Hall) にて演奏会形式でなされたが、正式には1981年5月10日リスボンのサン・カルロス劇場における舞台上演を挙げるべきだろう (演出: パオロ・トレヴィージ、指揮: クラウディオ・シモーネ、エルチア: エリゼット・バヤン、オジリデ: ロックウェル・ブレイク)。ロッシーニ・オペラ・フェスティヴァルでは1983年9月9日に初上演され (ロッシーニ劇場。演出: ピエル・ルイージ・ピッツィ、指揮: クラウディオ・シモーネ、エルチア: チェチーリア・ガスディア、オジリデ:



初版楽譜 (ピアノ伴奏譜。ポワエル  
デュー社、パリ、1822年。筆者所蔵)

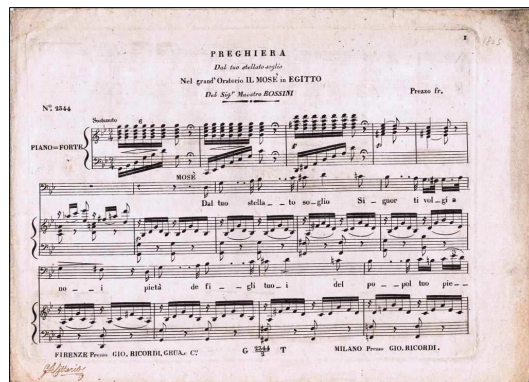


ロックウェル・ブレイク)、1985年9月にもキャストを変えて再演されている。けれどもそこで使われたのはロッシーニ財団の批判校訂版ではなく、シモーネ版であった(全集版の成立は2004年で、それ以前に第一次校訂譜が使われた形跡はない)。全集版による近年の重要上演に2011年8月のロッシーニ・オペラ・フェスティバルがあり、これはモゼをテロリストのウサーマ・ビン・ラーディンに擬したグラハム [またはグレアム]・ヴィック演出でも注目された(指揮:ロベルト・アッパード、エルチア:ソニア・ガナッシ、オジリデ:ドミトリー・コルチャック)。

#### 付記: 1819年と1820年の改訂について

ロッシーニは《エジプトのモゼ》初演からほどなく、サン・カルロ劇場との間に新たに二つのオペラを作曲する契約を結んだ(前記3月16日付の手紙にこれに関する記述がある)。その最初の作品が1818年12月3日初演の《リッチャルドとゾライデ》で、ここで初めて舞台上のバンドが使われた。次作《エルミオーネ》は《リッチャルドとゾライデ》に続く4ヶ月間に作曲され、1819年3月27日に初演を迎えるが、ロッシーニはその間に《アルミーダ》の2幕改作、カンタータの作曲、《オテッロ》再演を行っている。《エジプトのモゼ》再演の告知はこれに先立ち1818年12月28日付『両シチーリア王国新聞』でなされ、翌1819年の「四旬節最初の日曜日」に「新たに作曲される第3幕」を用いる、と書かれている<sup>18</sup>。ロッシーニは前記の仕事の合間に第3幕を改作し、折り(N.12)を新たに作曲して加えた。この改訂版《エジプトのモゼ》の初演は3月7日に行われ、翌日の『両シチーリア王国新聞』は、「我々はさしあたり想像力豊かなロッシーニと共に、とりわけ宗教的、感動的、崇高な頌歌(cantico)によっておのれの作品を豊かにし、新たなオリジナルの美を与えたことを喜ぼう」と記した(3月8日付)<sup>19</sup>。最初の2幕は基本的に1818年初演版のままであるが、印刷台本に第2幕アマルテアの aria (N.7) のテキストを欠くことから、1819年の上演では歌われなかったと推測されている(但し、楽譜上でカットされたわけではない)。

翌1820年3月のサン・カルロ劇場上演は、前年の改訂版の再演とあって台本が出版されなかったが、ロッシーニは第1幕ファラオーネの aria (眼からうろこが落ち *Cade dal ciglio il velo*) (N.4) を新たに作曲してカラーファ作曲の aria (N.4a) と差し替えた。前記アマルテアの aria は1819年と同様、歌われなかったと考えられている。その後ロッシーニはパリでの上演用に若干の変更を加えたが、折々の歌手のための修正や追加のみで、本格的に改作したわけではない<sup>20</sup>。



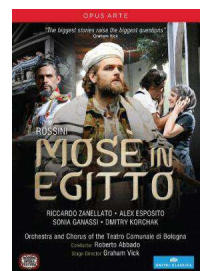
リコルディ社の「折り」ピアノ伴奏譜(1825年。筆者所蔵)

#### 推薦ディスク

##### 歌劇《エジプトのモゼ》2011年8月ペーザロ、ロッシーニ・オペラ・フェスティバル上演

[Opus Arte OABD7112D](BD) [Opus Arte OA1093D](DVD)

グラハム・ヴィック(演出) ロベルト・アッパード指揮ボローニャ市立劇場管弦楽団、同合唱団 エルチア:ソニア・ガナッシ(Ms)、アマルテア:オルガ・センデルスカヤ(S)、オジリデ:ディミトリー・コルチャック(T)、ファラオーネ:アレックス・エスポージト(B-Br)、モゼ:リッカルド・ザネッラート(B)ほか



<sup>1</sup> これに先立つナポリ作曲の3作のオペラ・セーリアは、《イングランド女王エリザベッタ》(1815年)、《オテッロ》(1816年)、《アルミーダ》(1817年)。  
<sup>2</sup> 1817年10月26日付でロッシーニがピエートロ・カルトーニに宛てた書簡(Gioachino Rossini, *Lettere e documenti, vol. I: 29 febbraio 1792-17 marzo 1822*, a cura di Bruno Cagli e Sergio Ragni, Pesaro Fondazione Rossini, 1992., pp.230-232.(書簡109)。カルトーニは11月12日から新たに興行師となることから、この契約は別な人物を介して進められたものと推測しうる。  
<sup>3</sup> Gioachino Rossini, *Lettere e documenti, IIIa: Lettere ai genitori. 18 febbraio 1812 - 22 giugno 1830*, a cura di Bruno Cagli e Sergio Ragni, Pesaro Fondazione Rossini, 2004., p.192., n.1.  
<sup>4</sup> Ibid., p.193.[書簡 IIIa.103]  
<sup>5</sup> Ibid., p.194.[書簡 IIIa.104]  
<sup>6</sup> Ibid., p.195.[書簡 IIIa.105]  
<sup>7</sup> Ibid., pp.196-197.[書簡 IIIa.106]  
<sup>8</sup> Ibid., p.198.[書簡 IIIa.107]  
<sup>9</sup> Ibid., p.199.[書簡 IIIa.108]  
<sup>10</sup> *Lettere e documenti, vol. I*, p.255.[書簡 121]

---

<sup>11</sup> *Lettere e documenti, IIIa*, p.200.[書簡 IIIa.100]

<sup>12</sup> *Lettere e documenti, vol.I*, p.254., n.1.

<sup>13</sup> *Lettere e documenti, IIIa.*, pp.201-202.[書簡 IIIa.110]

<sup>14</sup> 全集版《エジプトのモゼ》序文 pp.XXIV-XXV.に長文の引用あり。

<sup>15</sup> *Lettere e documenti, IIIa.*, pp.203-205.[書簡 IIIa.111]

<sup>16</sup> 全集版《エジプトのモゼ》序文 p.XXXIX.

<sup>17</sup> パリ初演がオペラ座（王立音楽アカデミー劇場）でイタリア語により行われたのは、エルチアを歌うジュディッタ・パスタの慈善公演という特例である。二日目からは王立イタリア劇場（サル・ルーヴォア）に会場が移された。この上演では、指揮したフェルディナン・エロルド [Louis-Joseph-Ferdinand Hérold, 1791-1833] が楽曲の変更と差し替えを行っている（詳細は全集版《エジプトのモゼ》序文 pp.XXIV-XXXVIII を参照されたい）。

<sup>18</sup> 全集版《エジプトのモゼ》序文 p.XXV.

<sup>19</sup> *Gioachino Rossini, Lettere e documenti*, a cura di Bruno Cagli e Sergio Ragni., vol.I., p.362.n.1.

<sup>20</sup> 1819、1820年のナポリ改訂、その後のパリでの変更の詳細は全集版序文 pp.XXV-XXXVIII.を参照されたい。